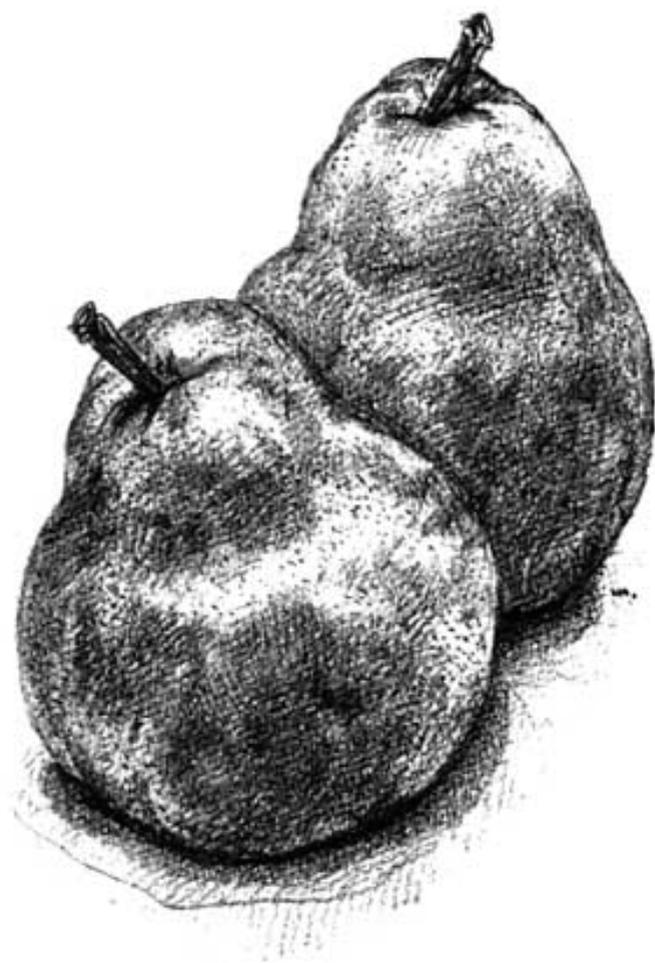


昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成22年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第50巻5月号(通巻610号)

# 風土



5

落の臺  
神蔵器

黄沙降るエンタシスてふ法隆寺  
ただけり一箸づつの土筆和  
堀の内彼岸の塔婆歩みゆく  
種袋大竹藪を背負来る  
てのひらに一粒万倍種選ぶ

色に出で青邨旧居の花蘇枋  
燕より先に毒消売の来る  
蛇出で鶴川村も東京都  
遠山の雪かがやきて窯開く  
日本晴杉の花粉の峽を出づ  
一塊は大志のごとし落の臺  
われにのこる死の大事あり揚雲雀



# 竹間集

同人作品



標本のの 瀬戸悠

寒の鯉けむりのごとき息を吐く  
一歩づつ臘梅の香のたしかなり  
手の内に敵あり海鼠喰つてをり  
取外す人工呼吸器水仙花  
標本の肺魚の骨が春を呼ぶ  
電柱はどこへもゆかず寒明けぬ  
ねんごろにわが血かよはす紅椿

春光 塩田博久

相模ノ国国分寺址下萌ゆる  
梅林や毎年同じ写真撮る  
春光やさざ波遊ぶ船溜まり  
岸壁に巨船聳ゆる朧かな  
春宵のピアノシヨパンを紡ぎ出す  
銀次忌来る日ごとの海の明るさに  
銀次忌の庭に見つけし董かな

ふらこい 代田青鳥

軋ませて渡る木の橋木の芽風  
春疾風百円シヨップの賑はひて  
播粉木で遺す薬剤涅槃西風  
啓蟄の土こそばゆし足裏かな  
顎上げて笑ふ園児等チューリップ  
ふらここや近くて遠し子らの家  
鞆漕ぐ地の果空の果

利休忌

関根洋子

一月の風を巻き込む神事の炎  
生きたとは死ぬる助走や白椿  
福寿草おのれ許すと言ふ事も  
岩塩のうすももいろや涅槃西風  
一口はブラツクコーヒー亀鳴けり  
利休忌や切つ先白き竹の筒  
新しき尼僧の頭巾春の雪

芽吹き

田中佐知子

滝一条落ち天地に春来たる  
雪解けや楳に菌打つ音のして  
ひとところゆるき流れやふきのたう  
鳥の声籠めたる空の芽吹きかな  
春子出づ光こぼるる杉林  
満ち潮が展ぐ夕映え残り鴨  
春宵の紅茶に添へて砂時計

恋の鷹

工藤ミネ子

雪汚すことなく暮れて湯治かな  
地吹雪の声立ち上る田面かな  
凍もどる山をひとつに杉の銚  
日の中に雪抛り春引き寄する  
一村をつつみあませる雪解靄  
峰を越す高さ白鳥帰りけり  
海を行くごと恋の鷹すれちがふ

鳥帰る

柴田久子

大空の扉を開けて鳥帰る  
鉛筆を削り減らして日永かな  
流木を支へてをりし薄ごほり  
一月の海辺の町に葬一つ  
寒灯の中のひとつは葬の灯  
紅梅や絵馬と睦みし神のこゑ  
初午の下準備らし五六人

松平郷

— 小野寺節子 —

待 春 や 葵 御 紋 の 石 扉  
霜 の 花 高 月 院 の し づ も り に  
「 将 軍 門 」 に 平 成 御 世 の 霜 の 声  
春 遠 か ら じ 仏 足 石 の 静 と 動  
仏 足 石 見 上 ぐ 白 息 の ど 仏  
伝 説 の 「 見 初 め の 井 戸 」 や 草 珊 瑚  
天 下 茶 屋 千 両 万 両 客 を 呼 ぶ  
千 両 や 笑 ひ 声 す る 天 下 茶 屋  
松 平 郷 守 り て 商 ふ 石 焼 芋  
遠 く に て 笑 ひ 顔 す る 焼 芋 屋

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

煌めきて氷柱を昇る朝日かな

近藤幸三郎

立春の玄関に置く杖二本  
辛夷咲く海女に上りの石畳  
あちこちの土筆の数ほど野に仏  
したたかな弾力持ちしもの芽かな

平成の桜田門の春の雪

遠藤道遙子

ものの芽の萌え出でにけり爆心地  
啄木の歌碑をふたたび冬鷗  
四人揃ふテニスコートや春隣  
三千院春の時雨となりけり

立春の赤土に立つ霜三分

柿沼盟子

げんまんの指こそばゆき花ミモザ  
海上の右側通行春の雲

表のみ俎板濡らし芹刻む  
春光やバッグに三粒のチョコレート

豎山道助

刃の如き一葉を浮かべ寒の水  
春寒しモナリザの間に警護官  
故郷に三日戻りて春田打つ  
碧眼のプロテスタント豆を打つ  
片栗の花を揺らして霊柩車

南奉栄蓮

春の施肥母のことばを撒くやうに  
節分草比叡の山をかがやかせ  
春灯し妓の地髪結ひ辛夷の芽  
かまくらの虎の口へと吸はれゆく  
畦焼きのあとに芽を出す土筆かな

◇特別作品◇(抄)

身ほとりのこと

池田 達二

机辺少し乱るるままに春の星  
たそがれの河津桜の色深め  
春暁の明るき夢の尾に乗りて  
春泥や子らの駈けゆく暇道  
夕霞あはあは寄する志太郡  
中空へこぞりて白木蓮大樹  
重きもの曳き出づるかに春満月  
天上に母の声とも春の月  
高階に置き捨てにして春の風邪  
退院の決まりし窓に春の風

# 風土独語／神蔵器



辛夷咲く海女に上りの石畳 近藤幸三郎

海女の句というときまつて思い出すのは、

海女とても陸こそよけれ桃の花 虚子

という虚子の句である。昭和二十三年、志摩周遊の折の句で『虚子百句』によれば、海女たちが潜ったあと舳に取り絡り、苦しい呼吸をしている有様を具に見、陸に上れば上ったで、嬉々として談笑する姿をまのあたりにしての句だという。流石に大虚子、旅中にあつても、海女たちの生活を確かに把握し、憐憫の情をおさえて彼女らを祝福している。

近藤さんの句は、虚子が「陸こそよけれ」という、その陸も「上りの石畳」なのである。陸の生活にも平坦な道が約束されているわけではない。海女たちにとつては海も陸も実は同じなのではないか。

房州では一回の潜水をへひといきといひ、そのへひといきを数十回も連続してくり返す。その間は船上に上つて休むことはなく、船ばたに浮いて呼吸を整えてまた潜る。船上上つて一と休みするまで約二時間、これを通常一日に三回ぐらゐ

繰り返して潜るそうである。つまり潜っている時間だけでも一日六時間である。私たちにはどうても考えられない苛酷な労働である。けれども海女たちは海に入る時いちばん生き生きとしてゐる。海へ出るのは海女にとつて生活のためというより生き甲斐なのだ。

辛夷の花も桃の花も共に春の季語であるが、虚子の句が「桃の花」、近藤さんの句が「辛夷の花」である。両者季語の使用わけが見事である。

平成の桜田門の春の雪 遠藤逍遙子

今年、三月三日は早朝より雪となり、東京は久し振りに銀世界であつた。

一八六〇年、万延元年三月三日といへば大雪、桜田門外の変のあつた日である。時の大老井伊直弼はこの朝雪の中を、上巳の節句の式に出席するため登城の途次、桜田門外の路上で水戸、薩摩の浪士に襲われ殺害された。

私たちは戦争中は水戸浪士らを勤皇の志士として大いに賞賛し称えたものであるが、戦後は安政の大獄は別として直弼の開国に踏みきつた先見の明、大政治家として高くたたえてゐる。時代によつて評価は全く反対になつた。いまは、歴史を越えて、桜田門に静かに雪が降つてゐる。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

大寒の砂一粒が靴に入る 川崎 内藤 静

春光の舳に掲ぐ女神像

種蒔いて昼から合唱団の指揮

路の臺古きことばを慈しむ

冴返る旧花街の荒格子 高槻 浅田 光代

堺・南宗寺

抽んでて宗易の墓白椿

さへづりや空にもありて水香場

水音のつまづき来たる路のたう

梅咲いてまつたうな空ありにけり

比叡の灯や雪解しづくの音のなか

流水や日はささくれし尾白鷺 札幌 岡田 真澄

無造作に置かる子規庵の枯糸瓜

雪解や明日のみゆる服探す

人葬るどの道も坂涅槃西風

一木は冬野の果てに佇ちつくす 川崎 豎山 道助

議事堂に黄色の怒声春の雷

誤植ある名刺も春の愁ひかな

薄氷や海馬に残るビッグバン

風船の力の抜けて上りけり

熱の子を背負ひて鬼女となる吹雪 香取 横田 島子

甘い物袋に詰める探梅行

旅人の振りして地元雛めぐり

料峭や百引く七の計算す

天空へ濤打ち返す春疾風

苗札の後向きなる昨夜の風

触れてみる屋のかまくらつると 横手 森屋 慶基

城の道ひと夜限りの小かまくら

帰るさの信号待つに雪女

梵天唄合の手入れて昂ぶれり

袂端折り荒梵天となりにけり